

2 南箕輪村. 動物調査を終えて.

伊那谷の清らかな水、澄み切った青い空、緑の山脈は伊那谷いや南箕輪村に住む私たちの、最も誇りとしているところであるが、その自然環境もここ二十数年間に著しく変遷したことは（前述のとおりである）。私たちは動物という側面から、現在、南箕輪に生息する動物たちが、自然のなかで、環境とどのようにかかわって生きているのかという視点で南箕輪の自然と動物の姿をとらえようとして、調査、観察をすすめてきた。

21世紀を迎えて間もない今日、伊那谷、南箕輪村の自然を守り育て、将来の世代に引き継いでいくという、責務が私たちにはあり、それは極めて重要なことと考える。

以下それぞれの分野の「解析および考察」で、種の環境との関わりについては考察とまとめをしてあるが、特に大切と考えられることを、箇条書きして、「動物のまとめ」にする。なお、これらの現状の問題点をふまえて、「多様な生物を育む自然環境の保全」という立場で南箕輪、村民と行政の行動による環境づくりを私たちは強く願うものである。

(1) ヤマネ、ムササビなどの生息が極めて少ない（絶滅寸前の希少種）それに反して、天然記念物として保護されてきた、ハクビシンは近年その増殖が著しく、被害が各所にでてきている。ヤマネ、ムササビの生息できる、高齢の針葉樹林帯がとみに少なくなっていることがヤマネ、ムササビの生息を困難にしている原因であろう。ヤマネ、ムササビの生息域はいま、古木の残されている、神社や寺院の境内に移行している。

(2) ヤマアカガエルやヒキガエルの生息域が特定され、その生息数が減少している。水質汚染やレジャー施設の建設による、環境汚染が原因のように思われる。

(3) ヒメギフチョウ、オオムラサキの生息が著しく少なく、生息地が特定されている。開発による食草群落の崩壊や心ない昆虫マニアの乱獲がその原因と考えられるが、一刻も早く保護地域を指定して保護していかなければならない。里山を大切にしてくヌヌギ、コナラ、エノキ、ケヤキなど広葉樹の植林をし、豊かな里山を育成する努力を続けたい。

(4) ミヤマセセリ、ヒメシロチョウ、チャマダラセセリなどの生息が減少している。またその生息域が河原に移行している。原因は草刈りが行われなくなったことから、彼等の生活環境がなくなり、大水などによる、草刈りと同様の操作がおこなわれている、河原の生活環境を求めて移行したものと思われる。水田や畑の畦草、山林、原野の草刈りを丹念にすることが、自然の生態系を復元させることになるのである。

(5) 魚類のアカザ、カマツカ、アブラハヤ、カジカなどの生息数の減少が見られたが、最近、下水道の普及による水質改善により、その生息数を著しく増加させている。

大泉ダムのアブラハヤ、大泉川、上流、中流、北沢川上流のカジカ、アマゴの生息数が増加している。大泉川と天竜川、黒川と天竜川合流点にはコイ、ウグイの生息が多い。

(6) 滝ノ沢川（黒川）流域小河川、水田地域にはホタル（ヘイケホタル）が生息し、最盛期には10数匹の飛翔を観察できる。小河川にはカワニナが多く生息し年々その数を増加させている。

(7) マツ枯れを起こすのは、マツのザイセンチュウであるが、それを媒介するのはマツマダラカミキリである。そのマツマダラカミキリを大芝森林でも、南原、北原、中ノ原の赤松平地林でも、目撃することがなかった。定期的に点検する必要がある。

(8) 大泉川も北沢川の水生昆虫相はじつに豊で、その水質の良さをあらわしている。。